2050 年の日本

世界潮流への対応と日本固有の課題克服が必要

デジタル経済圏の台頭をはじめとする世界トレンドは、日本経済・社会にも大きなインパクトをもたらす（図表Ⅱ-1-1）。まず国際関係で見れば、仮に世界で真の多国間主義が実現されたとしても、日本が国際的な多国間体制の構築支援や技術を通じた社会課題解決などを積極的に行わなければ、日本の国際的な地位は大幅に低下するだろう。

企業や産業で見れば、急速に進展するデジタル経済圏の拡大やそれに伴って形成される多様な消費市場で日本の企業が競争力を発揮できなければ、多くの市場や雇用が失われる。さらに、ビジネスを通じた社会課題解決が進まなければ、多くの社会課題は残されたままとなる。

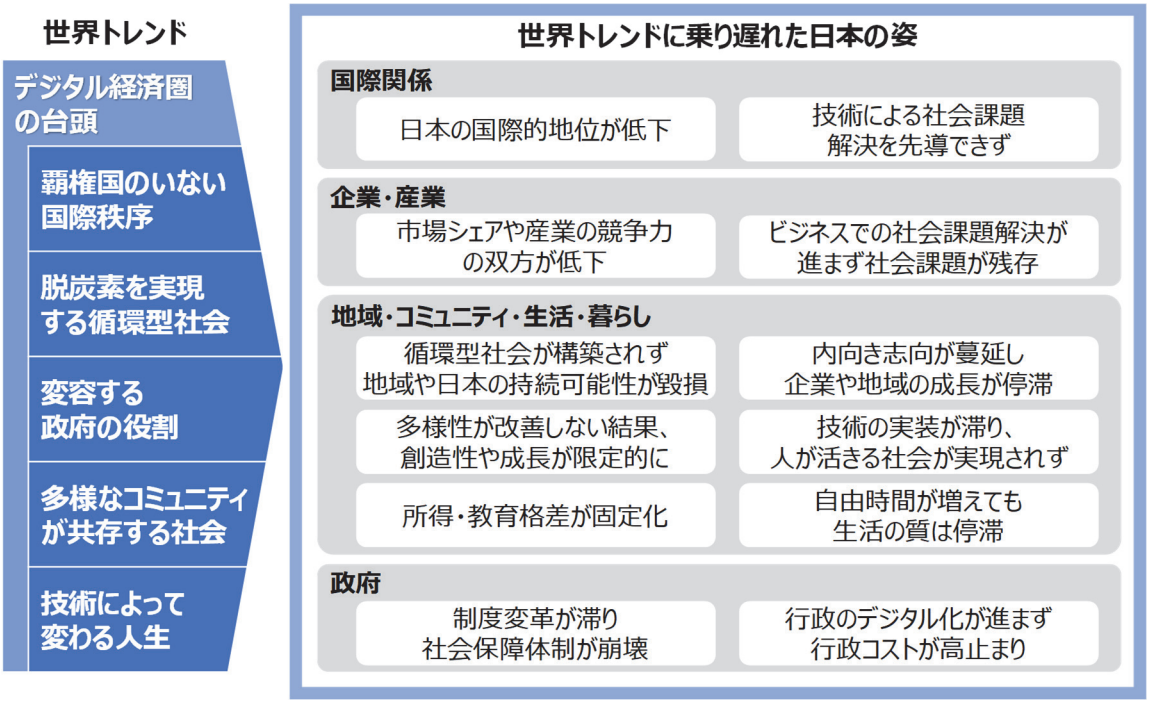
地域・コミュニティでは、循環型社会の構築が進まない状況が続けば資源輸入国である日本の持続可能性が低下するほか、コミュニティの内向き志向が蔓延すれば各地域で形成されるコミュニティの成長も限定的になる。また個人の生活・暮らしという視点では、仮に技術の進展に伴って自由な時間が増加したとしても、無為に過ごす時間ばかりが増えれば生活の質の改善にはつながらない。

日本は少子高齢化や社会保障負担の拡大など重い課題への対応が求められる中、新技術を活かせずに競争力の低下を招けば、多くの世界市場や雇用を失う。日本経済・社会・個人が活力を高めるためには、世界トレンドに対して受け身ではなく潮流の変化をチャンスと捉え、社会課題を解決し豊かな暮らしを実現する必要がある。そのためには、人間中心の技術活用や日本の良さ・強みの発揮とともに、政府・企業・個人による前向きな挑戦が不可欠だ。

図表Ⅱ-1-1

世界トレンドに受け身でいれば、日本の社会課題は深刻化

世界トレンドに乗り遅れた場合の日本経済・社会の姿



出所：三菱総合研究所

Copyright© Mitsubishi Research Institute, Inc.

あるべき姿は「豊かで持続可能な社会」

日本のあるべき姿はどのような社会か。それは、国民が実現したいと願う人生を、持続可能性を維持しつつもかなえうる社会であろう。これを具体化していくためには、2050 年の日本経済・社会を担っていく若者も含めて、われわれ自身が議論し構想していく必要がある。未来社会構想 2050 では、その議論の出発点として「豊かで持続可能な社会」という社会像を提示したい。具体的にどのような社会か、「持続可能」と「豊か」に分けて紹介する。

まず、持続可能な社会は、達成すべき最低限必要な目標と位置づける。持続可能の意味は、①経済面での持続可能性（政府債務の発散的拡大の回避、経済の新陳代謝など）②社会面での持続可能性（過度な経済格差の是正、機会の平等確保、政府への信頼など）③環境・資源面での持続可能性（脱炭素を実現する循環型社会、地球の生態系保全など）、と多岐にわたる。特に、①は日本の財政が危機的な状況であり、社会保障制度の抜本改革による持続可能性の確保が課題である。

次に、豊かな社会は、より高次の目標だ。経済的な豊かさのみならず、国民の幸せや満足度が高い社会であり、生活時間やコミュニティの充実、豊富な挑戦の機会なども含む総合的な概念である。「トレンド 6：技術によって変わる人生」(P.29-) で示した健康寿命の延伸はその一例であり、同じ寿命を全うするのでも健康状態次第で生活の満足度は大きく異なる。

こうした「豊かで持続可能な社会」を実現するために、①世界の中での日本、②産業・企業・国際競争力、③地域・社会・コミュニティ、④生活・家計・働き方、⑤政府・財政・社会保障の五つの分野別に必要となる取り組みをブレークダウンすると、それぞれ次のようになる。

① 日本の良さ･強みを活かした世界への貢献

世界の多極化やデジタル経済圏の拡大が進む中で、新たな国際秩序の形成が求められる。地球規模での課題解決に向けて、世界全体での「共通利益」を示し、各国の利害を調整するリーダーが必要になる。

戦後の国際社会への貢献を通じてソフトパワーを培ってきた日本は、他国からの自発的な支援を集め、未来の多国間の枠組み作りに向けて重要な役割を果たしうる存在だ。他にも、成長と安定を両立する社会モデルや、社会課題を解決する技術など、日本の良さ・強みが豊かで持続可能な世界の実現に貢献できる面は大きい。

② デジタル×フィジカルで新たな付加価値を創造

日本の匠の技術などフィジカル面での強みをデジタル技術との掛け算で強化することで、環境や防災など世界の社会課題をイノベーションで解決するポテンシャルは大きい。また、デジタル技術の普及による生活コストの低下から、家計支出に占める生活必需品のシェアは低下する。その分、個人の生活を豊かにする価値追求型消費のシェアは、現状 35%から 50%まで拡大していくだろう。消費者のニッチで多様なニーズに応える多品種・小ロットの高付加価値製品・サービスを世界にも提供できれば、大きな付加価値を生む。

その実現には、先鋭的な価値を創出する中小企業と、豊富な経営資源を有する大企業の融合が重要になるほか、人的資本の強化、デジタル技術を活用した経営高度化などを通じた企業競争力の強化が急がれる。

③ 地域マネジメントを強化し、持続可能な地域社会へ

デジタル技術が深く浸透した社会では、住む場所が通勤距離や買い物の利便性に縛られにくくなる。仕事と生活環境の両立が可能になり、地方の中核市などに人口が集積しやすくなる可能性が高まる。当社試算によると、地方の県庁所在市やその他の中核市の人口シェアは現状の 12%から 17%に拡大する見込み。

Copyright© Mitsubishi Research Institute, Inc.

こうした追い風を活かし地域社会の持続可能性を高めるには、中核市などを中心とする圏域単位での地域マネジメントが重要になる。圏域内の市町村の特性に応じた機能分化と連携により、行政サービスの効率化・高度化とともに、個別市町村の強みをつなげ、地域の魅力を高める相乗効果も期待できる。広域の地域単位で人材育成や研究開発など長期的な成長の種まきも可能になる。デジタル技術はより広域での地域マネジメント実現を後押しするだろう。

④　多様な価値観に基づく「自分らしい」人生を実現

人間中心の技術活用を進めることで仕事や家事は大幅に効率化され、自由に使える時間は増えるであろうが、それだけですべての人が、多様な価値観に基づく「自分らしい」人生を実現できるとは限らない。AI・ロボット化、労働市場のボーダーレス化が進展し、人間に求められるタスクはより創造的な領域へとシフトしていくなかで、個人の能力と所得の連動性が一段と高まる厳しい環境も予想される。

デジタル技術の浸透による過度な経済格差を是正するには、社会のニーズに応じた個人の継続的なスキルアップを促す「FLAP サイクル（詳細は P.74 を参照）」の実践が欠かせない。加えて、経済格差が教育格差や健康格差を通じて増幅・固定化されない社会の仕組み作りも肝要だ。

⑤　人生 100 年時代を支える財政･社会保障制度へ

未病・予防への取り組み強化やライフサイエンス技術の発達による健康寿命の延伸は、人々の QOL（生活の質）を高める上で極めて重要だ。2050 年までに健康寿命は約 7 歳伸びる可能性がある。ただし、財政面から見れば、健康寿命の延伸だけではむしろ社会保障支出が拡大し、財政の持続可能性が危ぶまれる。

健康寿命の延伸と財政の持続可能性を両立するには、高齢者が社会で活躍できる環境整備や、社会保障制度の抜本的な見直し、社会保障分野以外での行政コストの見直しもあわせて進める必要がある。改革により未来への投資余地が拡大すれば、人生 100 年時代における人々の「人生の質」が高まるとともに、日本経済・社会全体の持続可能性も向上する。

世界のトレンドをチャンスに変え、これら五つの取り組みを包括的に実行することができれば、2050 年の日本は社会課題を乗り越え、「豊かで持続可能な社会」を実現できるだろう。

Copyright© Mitsubishi Research Institute, Inc.

実現に向けて必要なアクション

「豊かで持続可能な社会」を実現するためには、さまざまな主体がそれぞれの立場で必要なアクションを取る必要がある。これらのアクションは、大別して①人間中心の技術活用、②日本の良さ・強みを活かす、③前向きな挑戦の三種類に分けることができる（図表Ⅱ-1-2）。

図表Ⅱ-1-2
「人間中心の技術活用」、「日本の良さ・強み」、「前向きな挑戦」で社会を変革
豊かで持続可能な社会の実現に向けて

出所：三菱総合研究所

① 人間中心の技術活用

2050 年にかけて次々と出現するであろう新しい技術を社会にどう取り込んでいくかは重要な課題だ。人工知能やロボットが悪用されれば、プライバシーをはじめ基本的人権の侵害、意思決定の操作、人間の能力や意欲の後退をもたらす可能性もある。人間の尊厳が損なわれ、社会も不安定化するだろう。2050 年にかけて飛躍的な発展が予想されるライフサイエンス技術も、その用途を誤れば、一部の富裕層における人間拡張の独占的な利用や健康格差の顕在化を生みかねない。一方で、デジタル技術やライフサイエンス技術が、生活の質を高める方向で強化されれば、人間を中心とする豊かな社会の実現に寄与する。

例えば、介護分野でもロボットの活用が進むと見られるが、高齢者を対象とする対人サービスは、ロボットが完全に代替することが非常に難しい分野の一つだ。ただし、介助者の負担を軽減するアシストスーツ、睡眠や健康状態の自動計測し夜間の見回り負担を軽減できるようになれば、これまで二人の介助者を必要としていたサービスが一人の介助者で済むようになる。こうした人間中心の技術活用は、人口が減少していく日本で満足度の高い生活を実現するためには不可欠だ。内閣府が制定した「人間中心の AI 社会原則[8]」にあるように、技術は「人々の能力を拡張し、多様な人々の多様な幸せの追求を可能とするために開発され、社会に展開され、活用されるべき」である。

[8] 統合イノベーション戦略推進会議決定「人間中心の AI 社会原則」2019 年 https://www8.cao.go.jp/cstp/aigensoku.pdf

Copyright© Mitsubishi Research Institute, Inc.

② 日本の良さ･強みを活かす

日本の良さ・強みとは、日本の歴史、文化、風土に根差したものである。2050 年にかけて、デジタル経済圏の拡大などでデジタル移民が拡大し、経済活動も一段とボーダーレス化が進むと見られるが、日本の良さ・強みは日本で暮らす人の中に受け継がれていく要素である。

世代交代や日本で暮らす人の多様化などで一時的に良さ・強みから離れる傾向が強まることもあるが、いずれ揺り戻しが来るだろう。NHK 放送文化研究所が継続実施している日本人の意識構造調査によると、1970 年代から 90 年代後半にかけて、若年層を中心に伝統から離脱する風潮が強まったが、90 年代後半以降は再び伝統を重視する傾向が強まっている[9]。日本の良さ・強みを整理すると、「和・匠・美」の三つに集約できると考えられる（図表Ⅱ-1-3）。

図表Ⅱ-1-3

2050 年にも受け継がれる日本の良さ･強み

多様化･ボーダーレス化する中でも日本で暮らす人に受け継がれる要素

出所：三菱総合研究所

「和」は、共存共栄、互恵、利他などを包含する概念である。和の心は、外交面／内政面で活かされている。外交面では、日本は戦後、国連に加盟して以来、穏健で中庸な平和主義外交に徹しており、この積み重ねによりソフトパワーと国際社会からの信頼を高めてきた[10]。自国の利益だけを優先するのではなく、世界全体でよい方向へ向かおうという真の多国間主義にも通ずる原則である。また、内政面では、世界でもまれな皆保険制度をはじめ、過度な経済格差拡大を良しとしない社会システム作りが、成熟した民主主義や社会の安定をもたらしている。

「匠」は、勤勉さや真面目さ、品質に妥協しない職人魂などを表す概念だ。ものづくりの分野だけでなく、サービス業におけるおもてなし、きめ細やかなサービスも包含する。日本人のプロ意識の高さが育んできた質の高い財やサービスは、Made in Japan に対する海外での高い信頼にもつながっている。高水準の財・サービスによって鍛えられた日本人の目は、さらなる質の向上への土壌となっている。経済的価値に表れない面もあるものの、プロフェッショナルの精神は日本が世界に誇るべきアイデンティティである。

「美」は、日本の豊かな自然や変化に富む四季と、そうした風土の中で育まれた文化、伝統芸能や繊細な感受性などが含まれる。豊かな自然は日本人に恵みをもたらしてきた一方で、地震や噴火、津波など畏れを抱かせる存在でもある。こうした中で培われてきたアニミズム（自然崇拝）や自然との共生は、豊かで持続可能な社会の根底に通じる意識である。

---

[9] NHK 放送文化研究所「日本人の意識構造[第八版]」NHK ブックス、2015 年

[10] 公益財団法人日本国際問題研究所「国際問題 2019 年 1・2 月合併号 No.678」、中満泉「多国間主義の現在と未来、日本への期待」

Copyright© Mitsubishi Research Institute, Inc.

③ 前向きな挑戦

上記①、②だけでは豊かで持続可能な社会は実現できない。国、企業、個人がそれぞれの立場で、持続可能性の確保や豊かさの向上に向けて挑戦と変革を続けることが重要になる。後述するように、今後世界における日本の経済的な地位は大きく低下していく。日本の良さ・強みを磨き、人間中心の技術活用を強化していくことは、世界における日本の魅力を高める要素にはなるが、それを実現することは容易ではない。

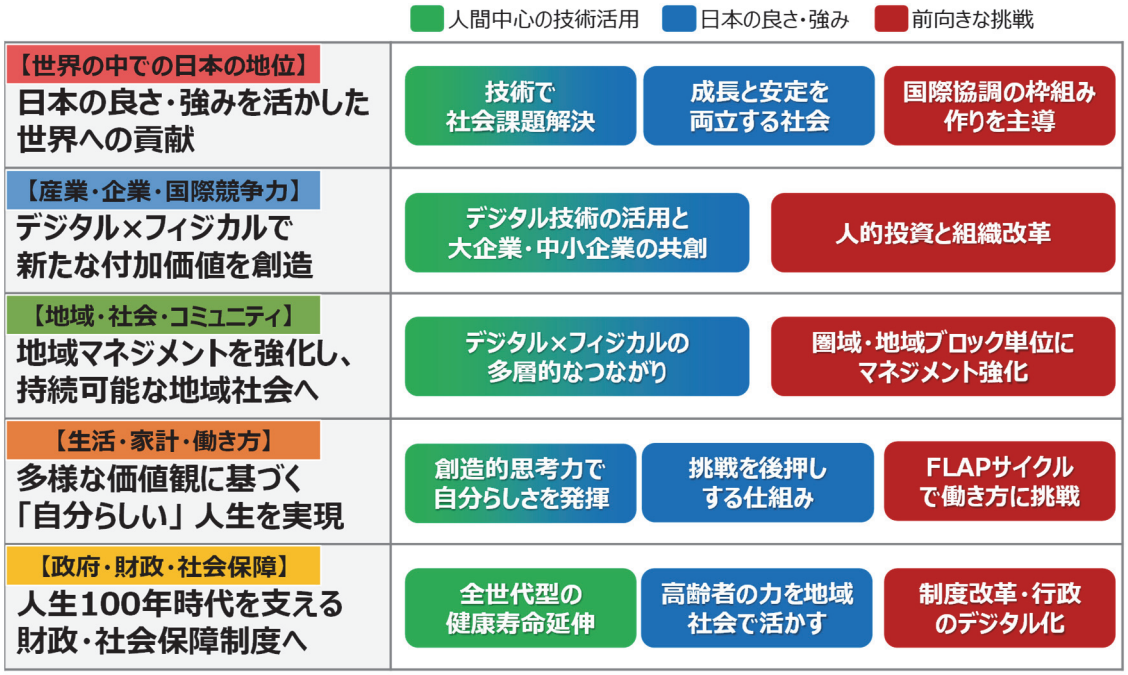
デジタル技術の進化により、企業も個人も、直面する競争環境は一段と厳しいものとなる。活発な新陳代謝と競争力強化への投資で、新たな付加価値を生み出していかなければ生き残れない。これまで距離や言葉の壁など、さまざまな障壁や情報の非対称性などによって市場が分断されていたが、技術によってシームレスにつながる未来の市場では、より高い付加価値や差別化要素を持たない企業や個人は埋没していく。一方で、市場参入へのハードルが下がり、ニッチな市場でも稼げるようになるほか、個人の努力や能力がより所得に反映されやすくなるなど、チャンスも広がっている。

国としても、こうした市場環境の変化を踏まえ、企業や個人が前向きな挑戦と失敗・学習を繰り返すことのできる仕組みを構築していくとともに、安心して挑戦できるセーフティーネットの構築も重要だ。また、世界の中で日本の地位を高めることも政府の役割である。多極化する国際社会の中で、国際社会の対立を静観するような「消極的外交」ではなく、新たな国際秩序の形成に積極的に貢献していく「積極的外交」が求められる。

「世界の中での日本」、「産業・企業・国際競争力」、「地域・社会・コミュニティ」、「生活・家計・働き方」、「政府・財政・社会保障」のそれぞれの分野でこれら三種類のアクションが取られれば、人が活き活きと過ごせる「豊かで持続可能な社会」は実現できる（図表 II-1-4）。

図表Ⅱ-1-4

豊かで持続可能な社会の実現に向けて必要な三種類のアクション



出所：三菱総合研究所

Copyright© Mitsubishi Research Institute, Inc.

三菱総合研究所が描く、豊かで持続可能な社会の姿

Copyright© Mitsubishi Research Institute, Inc.

Copyright© Mitsubishi Research Institute, Inc.

賑やかさが戻る祭り

伝統的な祭りは日本が残したい文化資産の一つだ。地元の住民やボランティアが総出で祭りを準備する。祭り当日は、お年寄りを含む住民やボランティアが大勢集まり、威勢よく神輿を担ぐ。

デジタル空間では神輿担ぎを VR 体験できる。遠くに住む地元出身者のほか、神輿が好きな外国人が神輿担ぎの「ギュウギュウ感」を楽しむ。

世界に誇る地酒

日本の伝統的な地場産業が世界から注目を浴びる。世界でも人気を集める地酒が増え、杜氏に弟子入りする外国人も。

旅行客も酒蔵を訪れ、縁側で利き酒を体験。地元の住民によるおもてなしもある。

今年の地酒は出来栄えがよく、デジタル空間で開催された世界品評会で金賞を見事獲得する。

伝統家屋でインバウンド

江戸時代に建てた合掌造りの家屋を代々守っていた家族が、文化の紹介と家屋の維持を兼ねて、民泊を始める。日本の伝統文化を体験したい外国人旅行客の間で大評判となる。

ロボット TAXI で到着した外国人旅行客を、夫婦が AI 翻訳機を使って出迎え。地元食材の名物料理でもてなし、旅行客は静かで心地よい旅を楽しむ。

自然を満喫する田舎暮らし

近代的なシェアハウスに世代が違う三家族が居住する。地元木材を使って建築、電気は太陽光でまかない環境負荷が小さい。

家の中では、男性がクラウドワークで都市のインテリア会社と仕事をし、お年寄りが遠隔診療を受け、親子三人が団らんする。田舎でも暮らしはだいぶ便利になったため、住むことが苦にならない。

田畑ではお年寄りや若者がロボットとの農作業に汗を流す。収穫した米や野菜は自分たちで食べるほか、近所の民泊施設や都会のお得意さまに送る。足腰補助スーツを着たお年寄りは元気いっぱいであり、アフリカの友人に AR システムを使って耕作指導も行う。

Copyright© Mitsubishi Research Institute, Inc.

都市の広場に集う人々

老若男女が広場に集い、散歩や買い物、ベンチで談笑する。実際に会っての談笑は楽しく、意外な人と出会うワクワク感もある。太古の昔から都市には広場がある。デジタル時代に広場の重要性が再認識される。

バックヤードでは無人トラックが荷物を搬送し、ロボットが荷下ろしを担う。広場には自動車が入らず、人々は安心してくつろげる。資源のリサイクルも進み、都市鉱山工場では粗大ゴミから金や鉄が精錬される。

デジタル空間には都市のさまざまなデータが行き交う。人の流れ、商品販売、エネルギー需給、気象などのデータを活用して、都市のマネジメントがよりスマートに。

都市で思い思いに仕事

都市のオフィスでは老若男女が働く。幼児のよい遊び相手であるヒト型ロボットの開発現場では、エンジニアのおばあさんが AR 技術を使ってデザインし、おじいさん、おばあさんの二人組がロボットに「しつけ」を教え込む。こうして開発されたロボットは無人工場で製造される。

もう一つのオフィスでは、世界展開を狙ったインテリア商品を開発中。世界各国の消費者と VR システムを使って意見交換し、商品開発に役立てる。

高齢者も核家族も便利な都市暮らし

おじいさんは海外留学中の孫との会話を楽しみ、おばあさんはロボットの手を借りて入浴でくつろぐ。

三階建ての木造住宅では家族で食事の準備をしている。その間、末っ子の幼児はロボットを遊び相手に待つ。お気に入りの産地の野菜を使った料理を運ぶ無人デリバリー車が到着する。家事や通勤にかかる時間が短縮され、家族との団らんが充実。

子どもの創造力を伸ばす学校

子どもたちが木を活かした校舎で学ぶ。音楽を自作・演奏したり、都市の模型を作ったり、校庭で捕まえたバッタを観察したり、得意の分野でグループワークに熱中する。

デジタル空間では「北極のシロクマを救え！」をテーマに子どもサミットを開催中。

自然豊かな校庭では子どもたちが元気に遊び回る。足腰補助スーツを着た近所のお年寄りが世話役を買って出る。

Copyright© Mitsubishi Research Institute, Inc.